

現況

1 キク

奥越地区の秋植え夏ギクは、6月出し品種の「つるぎ」で草丈 6.3 cm、「なるみ」で 7.6 cm、「せいざ」で 3.3 cm であり、4月9日時点で生育は遅い状態である。4月4日前後の降雪により、秋植えキクの新芽のき損、凍霜害症状（通称「シカミ」、写真1）が見られた。

病害虫として、春植えギクの一部にべと病が見られる。品種間差異がみられ、「白霧」が弱いと思われる。4月18日の調査では、ミナミキイロアザミウマ、クロゲハナアザミウマ、アブラムシ類が微発生しているのが確認された。

JAテラル越前キク部会の第1回キク作見会が4月18日に開催された。

あわら市の平坦地（田中々）では、露地の秋植えキクの草丈は 12.8 cm、ハウス栽培の秋植えキクの草丈は 45 cm に生育している。丘陵地（富津）では、旧盆出荷用のキクは4月15日前後から定植が始まっている。

病害虫として、平坦地のハウス（秋植えキク）で、リゾクトニア立枯れ病が中発生している。

福井市東郷地区では、4月15日の調査で、秋植えキクの芽立ちは品種によっては差が生じているが、おおむね生育は良好である。草丈は大きいもので 50 cm 程度。草丈 37 cm で発蕾している品種もある（蕾径 4 mm 程度）。病害虫として、アブラムシ類が少発生している。またハモグリバエ類の産卵痕が確認された。

春植え夏秋キクでは、挿し芽が4月4日～10日頃行われ（昨年4月10日頃）、定植は4月下旬を予定している（4月15日調査）。

福井市大土呂地区では、定植が4月13日～17日頃にかけて行われた（4月15日調査）。

丹生の越前町宮崎地区では、4月8日～11日頃（昨年4月13日～20日頃）にかけて、多くの品種が定植されたが、植え床が作れず、定植が終わっていない品種もあり、4月下旬まで定植は継続される見込み。品種は「小鈴」、「恋心」、「花絵」、「かなえ」、「秀水」等である（4月15日調査、4月17日聞き取り）。

越前市では、3月下旬に挿し芽が行われ、4月17日～19日頃（昨年3月下旬～4月16日）にかけて定植が行われた。本年は挿し芽後の腐りは殆ど見受けられなかった（4月15日調査、4月17日聞き取り）。

二州地区では、4月16日の調査で8月咲き小ギク品種の「はじめ」、「小鈴」、「恋心」等で、4月中下旬に定植を予定している。



写真1. 凍害(上)と霜害(下)

凍害では維管束部位が褐変する。霜害は葉に白い障害痕が発生する。

秋植え 7 月咲き品種では、芽立ち程度・草丈は品種により差が大きい。一部で摘心を行った。

若狭地区では、4 月 17 日の調査で、秋植えギク品種の「はなふさ」、「はじめ」、「清風」等が栽培されているが、「はじめ」と「清風」の芽立ちが少なくなっている。

春植え 8 月咲き品種の「くれない」、「さきかぜ」、「翁丸」等が栽培され、4 月 16 日から定植が行われた。

病虫害は特に確認されていない。

2 ユリ

あわら市丘陵地（富津）のシンテッポウユリでは、7 月中下旬出荷用の「オーガスタ」が、4 月上旬に露地に定植された。8 月下旬出荷用の品種では、葉数は 2~4 枚、9 月出荷用の「オーガスタ」、「雷山 2 号」はハウス内で育苗中で、発芽が始まっている。セルトレーの一部で、乾燥による発芽ムラが生じている。

春江では、冷凍球根を定植中である。一昨年雪害を受けたハウスは新築され、ピンク咲の品種「カトーネ」が栽培されている。

3 トルコギキョウ

あわら市平坦地（田中々）では、昨年に抑制栽培が行われた「ロベナホワイト」で、二度切り栽培が行われている。草丈 7.9 cm、出芽本数は 5.1 本である。芽の選りを順次行っている。追肥は 3 月上旬に行われた。2 月定植・新盆出荷型栽培では、ロジーナ系品種が 2 月 20 日頃に定植され、活着は良好である（写真 2）。



写真 2. 2 月に定植された
トルコギキョウの生育
(あわら市 4 月中旬)

越前市では、二度切り栽培の品種では草丈 8 cm で 6 対葉（昨年 10 cm で 6 対葉）である。盆用の品種では 4 月末に定植を予定している。6 月咲品種「ボヤージュグリーン」では、草丈 24 cm で 11 対葉（昨年 24 cm で 10 対葉）、「フルフル」では草丈 15 cm で 11 対葉であった（4 月 15 日調査、4 月 17 日聞き取り）。

二州地区では、旧盆出荷用の品種「ブルーシルエット」、「ピンクシルエット」が栽培されている。敦賀では購入苗を 4 月 4 日および 6 日に定植された。美浜では 4 月 20 日頃に購入苗を定植予定である。

若狭地区では、フルフルシリーズが 3 月上中旬より播種されている。バルカン系の品種は苗を購入し、4 月 11 日に定植された。

4 その他の切り花品目

あわら市平坦地（田中々）では、二度切り目のキンギョソウ「アスリートレッド」、「アスリートイエロー」、「アスリートホワイト」が栽培され、どの品種も草丈約 100 cm で収穫中である。

あわら市丘陵地（富津）のアスターは、電照促成栽培の品種が3月中旬にハウス内に定植された。本葉4～5対程度、電照は4時間の光中断で行われている。季咲栽培では、播種の準備が行われている。

若狭地区のスターチスは、昨年11月に定植された品種「アメリカンビューティー」、「ディープブルー」の開花が始まっている。草丈60～90cm、開花は昨年並みである。病虫害は特に確認されていない。

対 策

1 キクの管理

1) 夏秋ギクのエスレル処理による開花抑制

- (1) 7月咲き輪ギク品種「スーパーイエロー」や小ギク品種「小鈴」等の品種で実用性が高く、摘心後1～2回のエスレル10を処理することにより、開花の抑制と切り花品質を向上させることができる。品種、作型により開花抑制の効果に差異があるので注意する（表1参照）。
- (2) エスレル10処理の時期は、摘心直後に1回目の処理を行い、2回目は14日後に柔らかい茎葉を中心に全面散布する。ただし、同一品種の開花ピークをずらす場合は、2回目10日後処理と14日後処理を畝別に行う。
- (3) 高温に遭遇していた苗や老化苗は、エスレル10の効果が低くなる場合があるので注意する。
- (4) エスレル10の散布方法は、水道水やきれいな水で500倍に希釈する。散布時期は夕方がよく、葉先から少ししたたり落ちる程度に全面散布する。
- (5) 調整した薬剤はその日のうちに使用し、他の薬剤（農薬など）との混用は避ける。
- (6) 異常気象時（高温、低温、多雨、乾燥など）には効果が不安定なので注意する。また散布12時間以内に降雨のない条件で散布する。
- (7) 本年は盆ギクの開花前進化が危惧されるため、図1を参考にエスレル10を散布する。特に「小雨」では開花の前進が予測されるため、早急に対策をする必要がある。

表1. エスレル10の散布方法

薬 剤 名	対象作物	使 用 濃 度	使 用 時 期	使用方法及び注意事項
エ ス レ ル 10	キク	500～1,000倍	摘心時または定植後1週間以内及びその後10～14日毎	<ul style="list-style-type: none"> ・全面散布（株全体がぬれる程度）使用回数3回以内。 ・早期不時発蕾防止。
	キク（電照栽培）	500倍	親株摘心時	



図1. 8月咲きキクのエスレル散布モデル例

2) ハモグリバエ類の防除

(1) ハモグリバエ類の防除

ハモグリバエ類は5月まではナモグリバエ、6月以降に発生する種はマメハモグリバエと優占種が遷移するため、多くの種に効果がある薬剤を選定する。ディアナ SC5000 倍液を 10a あたり 100~300 リットルを散布する。ハモグリバエ類の幼虫が入った葉は二次発生と細菌感染の原因となるため、下葉かきをかねて除去する。できるだけ落とした下葉も圃場から除去する。

2 LAユリの収穫までの管理

- (1) 花蕾がのぞいてからは切り花をかたくするため、徐々に灌水を控えるようにするが、極端に灌水を控えると、葉やけの原因となるため注意する。例えば、これまでの灌水間隔が毎日なら、週3回というように間隔をあけることが需要である。特に曇雨天が続いた後、急激に晴れた時に日焼けしやすい。
- (2) 生育が進むと地上部が重くなるため、曲がりが出る場合がある。ネット上げが遅れないようにし、支柱の間隔が離れている場合は、補強のために中間に杭を打つ。
- (3) 萌芽初期に7~10日毎にダコニール 1000、アフエットフロアブル、ポリオキシシン AL 水溶剤で防除するが、生育後半は薬剤による葉の汚れに気をつける。

3 トルコギキョウの管理

- (1) 定植後の灌水是活着を良好にし、初期生育を促進させるため根が張るまで十分灌水する。特に、花芽分化が始まる本葉8対(草丈が15~20cm)頃までに水分や肥料が少ないと切り花のボリュームが不足するため、積極的に灌水を行なう。
- (2) 二度切り栽培は、草丈が10~20cm時に生育が良い茎を残す整枝を行なう。多く茎を残すと切り花のボリュームが小さくなるので、残す茎数は、株当たり2本程度とする。ただし、株に勢いが無い時には整枝しない。
- (3) トルコギキョウは根張りが悪いと上葉が小さくなる「うらごけ」がおこる。圃場排水に努め、生育状況をみながら、液肥を施用する。特に春植えは、活着後の生育の状態を見ながら液肥(OKF-1の500~1000倍など)を中心に追肥する。
- (4) 定植後に生育が停滞し、葉が淡黄色になって枯れる場合がある。これは主に塩類濃度(最適 EC: 0.3~0.5mS) 1.0mS以上と高い場合に多く見られる。定植前に土壌調査を行い、ECが高い場合は、水をかけ流したり、表土5cm程度を削り取ったりして、塩類を除去する。
- (5) 土壌酸度(pH)が低い時も同様な障害が発生する。土壌酸度はpH6.5前後がよく、酸性土壌ではマンガン過剰症状、上位葉先端や周縁部に黄白斑点、新芽の萎縮が見られる。低pHには薄い石灰水(苦土石灰などの石灰資材を100g/水10リットルに溶かす)10リットルを3m²に土壌施用する。効果が不十分であれば再度施す。
- (6) 立枯病はフザリウム菌とピシウム菌によるものが主である。フザリウムの病斑は灰白色粉状のかびが密生する。過湿にならないように管理して、丈夫に育てる。発病株は抜き取り焼却する。
- (7) 葉先枯れ対策には、日中に換気を十分行い、軟弱徒長気味の生育をさせない。また、雨や曇天が続いたあとの好天で発生しやすいので、雨や曇天の日は、通風機や暖房機の通風運転で施設内の空気を常時動かすようにする。また、例年発生の多い品種では、カルシウム剤の葉面散布を定植1か月後から1週間ごとに行うとよい。

4 促成スイセンの球根掘り取りと球根の貯蔵前処理

(1) 掘り取った球根の乾燥は、高温処理を開始するまでに、球根の表皮が親指の腹で簡単にむける程度まで球根を乾燥させる。乾燥方法は、風通しのよい場所で、陰干しする（写真3）。直射日光があたると火傷状に傷が残り、腐敗の原因となるため、注意する。球根は高温としないようにする。

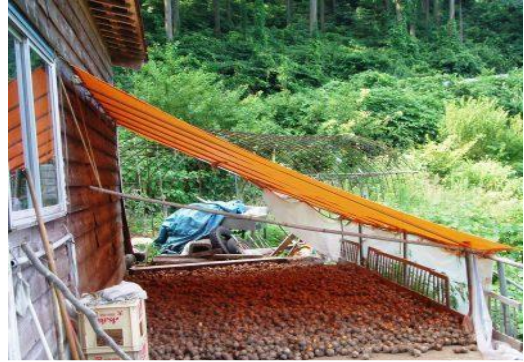


写真 3: 球根を乾燥させるには直射日光を避けて、陰干しを行う。

参考：アメダスの気象データ

